



○千利休

初名千與四郎薙髮の後千宗器又當津南莊今市町の人

先祖より久しくここに住み十七歳の頃より茶道小僧宗道陳小僧にて名を
得たり道陳ある時紹鷗（お智の布小十與に弟といふ者ありて茶道小僧
籠く時々ありけるが牧寄の道見悪むに報復も絶しく圓竹休と
語れを紹鷗茶風を承せ作らんとせしむる者小僧も休といひける於足
利休天下小名高く世人の崇敬するに利休ある日門弟子を聚く船
中へお牧寄の道見よりお家崎卿の歌ふ

花よのこはくくんふ山星は君向のまれまはせそや

け古舟とひくお茶道の口傳とまると宣ひける又利休法師一とる紹鷗
改く清侍一とる其具の末へを厥后太閤秀吉公召し利休居士と
賜り若干の領地をあたはれしむる事公本意も心は閑居
隠遁のころありけるよや慈鎮和尚の歌は口號ゆひたり
けがごとかり入るるもとせむけりる橋とあるを悲しむ

其後謗言の事ありて終小滅せりとす

○鼠樓栗新左衛門

出津南莊目下所居住して刀鞘師人細工に名譽は

得く刀の鞘ロロリと能合ゆ小世人異名せり其上に輝たれ智叡の上
みく秀吉公召し召されし御加申上り又詩教も推持くとも優
ある時園白秀次公の御前小伺候の時むりの希小山の香の時普陀洛寺
の庭小飾せゆひ一士峯といふ銘の盆石あり人献り侍りたるを見く
詩風賦一とく曰

千里飛來入座間 自今何用在東關

不知山魄化成石 士嶺無端拈出看

拾きたてはすみゆひ一ふの山天をなみと川沖ちうと
朝野任代の時沖波海連日ありたるを
秀吉公召し召されし御加申上り又詩教も推持くとも優
ある時園白秀次公の御前小伺候の時むりの希小山の香の時普陀洛寺
の庭小飾せゆひ一士峯といふ銘の盆石あり人献り侍りたるを見く
詩風賦一とく曰